【主題】生涯スポーツに親しむ児童の育成

【副題】「みる・ささえる」を体現する教師の姿と児童の変容に着目して

【学校・団体名】　大河原町立金ケ瀬小学校
【役職名・氏名】　教諭・渋谷海

1　主題設定の理由

「小学校の体育（とりわけ体育的行事）は、プレイヤーとしての指導に偏りすぎていないだろうか？」これが、体育主任として抱いた問いであった。

運動会では、児童が演技や競技を「する」時間よりも、他学年の演技を「みる」時間の方が長い。係として行事を「ささえる」時間も然りである。それにも関わらず、指導の重点は「する」に向けられてきた。

スポーツ庁は『第３期スポーツ基本計画』において「する・みる・ささえる」という多様なスポーツとの関わり方を推奨している。これは、児童の将来を見据えた生涯スポーツの理念といえる。しかし、学校の体育的行事において、「みる・ささえる」が意図的かつ十分に指導されてきているとは言い難い。

本研究では「運動会」を実践の場として選択した。運動会には、元々「みる・ささえる」時間が豊富にある。その時間に教育的な意味づけをする。新しい取り組みを追加するのではなく、既存の行事が本来持っている価値を際立たせる方向でマネジメントを行おうと考えた。これは、働き方改革の文脈からあらゆる行事が削減されていく中、業務を増やさずに教育の質を高めることができないだろうか、という挑戦でもある。

体育主任は、基本的に年度単位で交代する可能性がある。そのため、「短期間でも再現できる」ことを重視し、体育主任着任から２年間の実践をもとに論じる。

2　研究の仮説

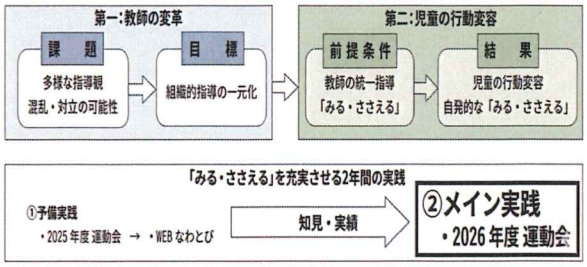
体育的行事において、教師が「みる（児童の伸びへの着目・称賛）」「ささえる（指導方針の一元化）」を体現すれば、児童自身の「みる・ささえる」活動が自発的に生まれ、運動の得意・苦手に関わらず、すべての児童に生涯スポーツに親しむ資質・能力の基礎が育まれるであろう。

3　研究の全体像

第一に、教師の指導観の一元化を行う。職員室内には多様な指導観が存在し、混乱や対立が生まれやすい状況がある。組織として一元化された指導を行うための教師の変革を目指す。

第二に、児童の行動の変容を目指す。教師の指導観が一元化され、「みる・ささえる」ことの教育的価値を児童が享受できる環境が整えば、その結果として児童の行動も変容し、自発的な「みる・ささえる」活動が生まれると考える。

教師の変革と児童の変容を促すための２年間の実践を、①予備実践（2025 年度運動会・WEB なわとび）②メイン実践（2026 年度運動会）に区分する。予備実践において得られた知見や実績をもとに、メイン実践において改善・検証を行う。



図① 研究の全体像

4　予備実践の実際

4−1　2025 年度運動会

（1）組織的な課題と改善アプローチ

本校勤務 2 年目に体育主任を命ぜられた。前年度の運動会から、課題として次の二点が考えられた。

- 運営が勤務年数の長い職員の記憶や経験則に依存しており、運営が属人的であった
- 児童の主体性をどこまで重んじ、集団としての規律をどこまで求めるかという基準が曖昧であったため、教師の指導方針にブレが生じていた。

一方で、6 年生の応援団を中心に練習指導を行う文化が根付き、有志によるチアリーダー活動など、児童の自主性を活かす場が既にあるという強みもあった。そこで①運営の脱・属人化、②指導方針の統一、③児童主体の運動会の強化、という３つのアプローチに着手した。

まず、運営の脱・属人化を図るため、前年度の運営上で議論になった点や混乱が生じた点について徹底的に実施要項への加筆・修正を施した。

次に、指導方針の統一においては、運動会の理想像として『応援が楽しい運動会』という「みる・ささえる」に重点を置いた明確なコンセプトを職員間で共有し、目指す方向性を示した。

そして、最も重要視したのが、「③児童主体の運動会の強化」である。これこそが生涯スポーツの素地を育む中核であり、先に述べた「運営の脱・属人化」と「指導方針の統一」は、児童が安心して主体性を発揮するための土台として機能すると位置付けた。

(2) 運営の実際と課題

実際の運営においては、６年生の自主的な動きが生まれた。ペットボトルを用いた応援グッズを自ら制作するなど、「みる・ささえる」行動があった。

写真① 応援グッズを用いた応援の様子

しかし、総練習を通して新たな課題が明らかになった。

- 一部の児童のみが盛り上がる応援に留まり、全校児童への波及には至らなかった。
- マナーのメリハリが弱くなり、静寂にするべき場面での切り替えが不十分であった。
- どこまで児童に任せ、どこから教師が介入するかの判断基準が教師間で共有されておらず、指導にブレが生じた。

総練習後の反省会において、「応援の力で全員が楽しむ」というコンセプトに立ち返り、楽しい応援を全体へ波及させる手立ての必要性が議論された。そこで、運動会直前の全体練習において、各学年の表現運動で使用される楽曲のサビの動き（手拍子や掛け声など）を全員で練習した。また、「盛り上がりと静寂はセット」ということを伝え、マナーの重要性を確認した。

運動会当日は全校児童が一体となって他学年の表現を盛り上げることができた。６年生の感想には「会場にいる人たちも笑ったり盛り上がったりしていて楽しかった」という言葉があった。保護者からのアンケートでも「応援に一生懸命取り組む姿に成長を感じた」との声が寄せられた。応援や観戦を通して「みる・ささえる」楽しさを児童が実感できたことが確認できた。

4-2 WEB 縄跳び

(1) 目的と働き方改革を見据えた提案

本校では冬季に「業間縄跳び」という活動が計画されている。この取り組みに、教育的意味づけを強めるため、宮城県が推奨する「Web なわとび広場（長なわ八の字跳び）」への参加を職員に提案した。

体力向上はもとより、最大のねらいは日常活動における「みる・ささえる」関わり方の強化である。長縄跳びの特性上、運動が得意な児童と苦手な児童の協働が不可欠であり、学級全員のモチベーション向上が求められる。それを実現するため、児童と教師の双方が、「記録の伸び」や「取り組みのプロセス」に注目し、ポジティブな声かけを徹底することを共通の指導方針とした。職員にはこの視点での見取りと指導を依頼し、その変容を事後アンケートで検証することを提案した。

また、本実践には「働き方改革」の視点も意図的に盛り込んだ。新たな活動を単に導入するだけでは、職員の業務負担増加を招きかねない。また、一度導入された活動が慣例化し、効果検証がなされないまま形骸化して継続されるリスクがある。そこで、あらかじめ「『みる』『ささえる』視点での教育的効果を検証し、次年度の継続可否を判断する」ということを示した。

(2) 実践の成果と変容

設問	対象	肯定的回答率
みんなで同じ目標に向かって取り組めましたか（「ささえる」意識）	児童	96%
みんなで励まし合いながらできましたか（「みる」意識）	児童	97%
記録は向上しましたか	教師	100%
児童同士の声がけは増えましたか（「みる」行動）	教師	100%
否定的な発言は減少しましたか（「ささえる」行動）	教師	100%

表①WEB なわとびアンケート結果（４件法）

実施後の児童アンケートおよび職員アンケートからは、確かな成果が確認された。自由記述からは、学級の記録向上という結果だけでなく、「連続で跳べなかった友達が跳べるようになった」という他者の成長を喜ぶ児童の姿や、「ミスしたときに励まし合えた」という失敗を許容し支え合う姿が数多く見られた。

職員アンケートにおいても、初任２年目の教師から「今回の取り組みで、一つになって頑張ろうという気持ちが成長したように感じる」との記述があり、児童の情意面の変容を確実に捉えていた。本実践を通じ、児童

は「他者の成長を喜ぶ」「肯定的な声をかける」という「みる・ささえる」関わり方を、日常の文脈のなかで実感をもって学ぶことができたと言える。

5　メイン実践の実際（2026 年度運動会）

(1) コンセプト：「バレーの熱狂」と「テニスの敬意」

前年度の運動会や WEB なわとびの成果と課題を踏まえ、コンセプトを『応援が楽しい運動会 ver.2 ～「バレーの熱狂」×「テニスの敬意」～』とした。これは、昨年度の総練習後に児童へ指導した「盛り上がりと静寂はセットである」という視点を、教員側の指導指標として再構築させたものである。互いに励まし合うバレーボールの「熱狂」と、サーブ前の静寂を重んじるテニスの「敬意」という二つのスポーツ文化を職員間で共有することで、「楽しさ」と「規律」の双方が、本物のスポーツが持つ本質的な価値であることを共通理解した。

(2) 指導観の融合と継続性のある指導

このコンセプトの設定には、二つの意図が存在した。

第一に、教師間における価値観の融合である。「楽しさ・主体性重視」の指導観と、「規律・集団行動重視」の指導観が混在していたが、どちらも児童の成長を願う誠実な思いから生まれたものである。これを「バレーボールの一体感」と「テニスのマナー」という具体的なスポーツの特性に置き換えて提示することで、双方が大切にしたい価値観を内包した指導指標とした。

第二に、指導の継続性である。「励まし合う」行動は WEB なわとびで培ったものであり、「完全な静寂をつくる」マナーは前年度の運動会総練習の課題から生まれた。単発の行事としてではなく、昨年度からの実践の連続性の上に今年度の活動が位置づいていることを明示することで、職員に納得感をもって受け入れられた。

また、昨年度の課題として、教員が介入する判断基準の不明瞭さが挙げられたことを踏まえ「やらされる応援にだけはしないようにしましょう。」という、しないことを決める提案をした。教師の裁量と児童の自主性を最大限活かしながら方向性を定めることをねらった。

(3) 児童の主体性と一体感を引き出す工夫

全校共通のテーマソングの設定を提案した。前年度は各学年の表現曲を急遽共有したため、練習コストが非常に高かった。全校共通のテーマソングを設定することで、練習コストを抑えつつ、バレーボールの応援のような一体感を効率的に生み出せると考えた。

6 年生による選曲の結果、楽曲は WANIMA の『ともに』に決定し、冒頭の 15 秒間を運動会中に流すこと、その際の全校手拍子とジャンプの振り付けを運動委員会の児童が考案することが決まった。

さらに、運動会のスローガンを児童と共に話し合った。テーマソングと関連させ『進め！ともに！君らしく』とした。児童からは「『ともに』には赤組も白組も関係なく一丸となること、『君らしく』には自分なりの全力を出すという意味が込められている」という解釈が示された。このプロセス自体が、互いを励まし合い、それぞれの精一杯の姿を尊重するという「みる」「ささえる」関わり方の深まりを証明していた。

(4) 総練習反省会における意思決定と当日の変容

総練習後の職員反省会では、他学年の表現運動の際、観客席の児童が立ち上がって一緒に踊ることの是非が議論となった。ある職員から「今年度のコンセプトを踏まえると、この盛り上がりは良いのではないか」との意見が出され、最終的に「踊る場所を明確にした上で認める」という決定に至った。これは、職員室において運動会のコンセプトが判断指標として機能し、多様な指導観が尊重された意思決定の場面であった。

写真② 応援席で低学年表現に合わせて一緒に踊る児童

運動会当日は、開会式前、休憩後、最終種目（リレー）の入退場時の計 4 回、テーマソングを放送した。全校児童は 1 回目から全力で手拍子とジャンプを行い、その熱気は来校した保護者へも伝播し、次第に会場全体へ手拍子が広がった。

写真③ テーマソング放送時の児童の様子（開会式前）

(5) 教育的価値の最大化と業務効率化の両立

今年度の実践は、職員間の共通理解（コンセプト）が

明確な判断指標となり、職員室全体が同じ方向を向いて検討を進める同僚性の構築に寄与した。

また、テーマソングの設定という新規の取り組みを行う一方で、校庭へのペグ打ち作業の廃止、事前の作成書類の削減、さらに全体練習の回数を前年度の 4 回から3回へと削減するなど、業務の効率化と負担軽減（働き方改革）を同時に推し進めた。業務を削減しても、明確なコンセプトと組織的な指導体制があれば、行事の教育的価値や児童の変容は最大化できるという確証を得ることができた。

職員からは「これまでで一番楽しい運動会だった」「児童の全力の応援に感動し、成長を感じた」との評価が得られた。児童の変容としても、6年生が応援を盛り上げるために自主的に応援グッズを作成するなど、前年度の文化が自発的に継承されていた。6 年生からは「本気で応援したから負けて本当に悔しかった。でも、勝ち負け関係なく楽しかった。」と話された。勝敗という「する」の結果と、楽しさという「みる・ささえる」の結果が、児童の中で両立していたことが分かる。保護者からは「応援合戦の迫力に圧倒された」「子どもたちが楽しそうに応援している姿が印象的だった」という声があり、「みる・ささえる」力が、保護者にも波及したことが窺えた。

6　研究の成果と課題

（1）研究の成果

①教師・組織の変革

最大の成果は、体育主任が細部の方法論をトップダウンで指示するのではなく、価値観を融合させたコンセプトを提示し、具体的な実践方法は各学年の職員や児童に委ねた点にある。明確な判断指標や指導方針が共有されていたため、児童から出たアイディアを受け入れ、その具現化を支えることができた。このような、ビジョンの一元化と手段の多様化の両立により、業務効率化を推進しつつも行事の質を高めるという、持続可能な行事経営を実現することができた。

②児童の変容

応援方法の具体化と構造化により、全校児童の間にポジティブな声掛けや一体感を創出する具体的なマナーや応援が定着した。これにより、従来の体育的行事にありがちだった「運動が得意な児童だけが主役となる舞台」から脱却し、運動の苦手な児童も応援グッズの制作や運営への参画、本番での応援活動（みる・ささえる）を通して、行事を共に作り上げる対等な仲間としての役割を果たす姿が見られた。児童が「する」ことのみに囚われず「スポーツとの多様な関わり方」を自発的に見出していったプロセスは、生涯スポーツを豊かに楽しむ素地が確実に培われていることを示している。

写真④　6年生作成の応援グッズで盛り上がる児童

（2）課題

第一の課題は、体育主任の交代時における持続可能性である。今後、若手職員への引き継ぎがあることが考えられるが、単に行事の手順をマニュアルとして引き継ぐだけではなく、コンセプトを共有し組織を動かすリーダー育成（OJT）が求められる。

第二に、体育的行事という全校が一斉に取り組む場で培った「みる・ささえる」価値を、いかに日頃の体育の授業や児童の日常へ定着させるかである。これを具現化するためには、教師・児童の双方が、多様なスポーツとの関わり方を価値付け続ける意識が必要不可欠であり、持続可能なシステムづくりが求められる。

7　おわりに

2年間の実践を通じて見えたのは、「教師が『みる・ささえる』を体現すれば、児童も変わる」という事実であり、それはすなわち、“教師の変化が先”ということでもあった。教師の指導観が一元化された時、児童の「みる・ささえる」行動は自発的なものとなった。

本研究は、運動会という既存の行事を選び、もともとあった「みる・ささえる」時間に教育的意味づけを行った。「働き方改革」の推進が叫ばれる今、すでにあるものの価値を見直す視点こそが、教育の質と効率化を両立させる鍵となる。

今回は体育主任という立場から実践したが、たとえ立場が変わったとしても、児童の未来を明るく照らすための教育を考え続ける志は、普遍のものである。

教師が変われば、児童も変わる。児童の未来は、私たち教師に掛かっている。

※参考文献

スポーツ庁「第３期スポーツ基本計画」（2022）